

# 第一次世界大戦期における イギリス国教会の戦争認識

— ウィリアム・テンブルの認識を中心に —

吉 田 正 広

## はじめに

1942年にカンタベリー大主教に就任したウィリアム・テンブルは、国教会の最高責任者としてナチス・ドイツに対する戦いの中でいわば国民の精神的な指導者としての地位を得ていた。テンブルは、第二次世界大戦中にBBCラジオを通じて、国家の道徳性の問題、悪を阻止するための暴力の正当性の問題、殺人の正当性の問題、兵士の死の問題、ドイツのキリスト教徒との交わりの問題など、戦争にかかわる信仰の諸問題を国民一人一人に直接語りかけていた。このようなテンブルのメッセージは戦争の正当性や国民の一体性をイギリス国民の心の中に維持する上で重要な役割を演じたはずである<sup>1)</sup>。このウィリアム・テンブルは第一次世界大戦が始まったときにはロンドンの中心街ピカデリーにあるセント・ジェームズ教会の主任司祭に就任したばかりであった。セント・ジェームズ教会での彼の説教は当時、単なる戦争賛美でなかったことで有名であり、戦争を「聖戦」として教区民に若者を兵士に志願するよう説教壇から語りかけることに熱心であった他の聖職者たちとは一線を画していた<sup>2)</sup>。このようにテンブルが第二次世界大戦期にBBCを通じて国民に訴えかけた戦争論の原型は、第一次世界大戦期にロンドンの一教区教会の若き主任司祭とし

での、また、第一次世界大戦に衝撃を受けて国教会の改革運動に積極的に乗り出したウィリアム・templの活動にあつたのではないだろうか。本稿は、第一次世界大戦期におけるウィリアム・templの戦争論を、その背景となつたイギリス国教会全体の戦争に対する関わりの中で明らかにすることを直接の課題とする<sup>3)</sup>。

本稿では、まず最初に、第一次世界大戦の勃発はイギリス国教会の聖職者たちにどのような影響を与えたのか、それまで平和の問題にかかわつてきた聖職者たちが戦争の勃発とともにその姿勢をどのように変化させたのか、さらに、戦争の原因についてどのように考えたのかについて、先行研究に依拠しながら整理しておきたい。そして、戦前には共感を懐いていたドイツやドイツ人に対する聖職者たちの認識に、戦争勃発後どのような変化が生じたのだろうか。これらの諸問題を整理した上で、第一次世界大戦初期におけるtemplの戦争論を整理し、彼は戦争をどのように考えたのかを考察するつもりである。その際、単に戦争原因論にとどまらず、第一次世界大戦の経験がtemplの思想全体にどのような影響を持ったのか、また彼の戦争論は国教会の聖職者たちの中でどのような位置にあつたのかを明確にしておきたい。

## I 第一次世界大戦の勃発と教会

第一次世界大戦が勃発した時、聖職者たちは戦争の原因についてどのように認識し、また彼らの戦争認識はその後どのように変化したのだろうか。

戦争が勃発した直後における戦争の原因については、「懲罰理論」という考え方が主流を占め、イングランドの罪を特に強調した。この点では福音主義派もアングロ・カソリックも見解が一致したと言われている。すなわち、戦争は「天の裁き、すなわち、西欧の諸国民、特にイングランドを罰するために主によって『送られた』惨禍」と認識した。悪徳の根元は間違つた信仰にあり、20世紀には、唯物論的で、工業化し、都市化し、世俗化した文明によって培われた「進歩への信仰」が神への信仰に取って代わつた。聖書講読や家族礼拝は一

般には行われなくなり、教会出席は宗教センスごとに減る一方で、日曜日の新聞配布や商売、遠足、低俗な娯楽による安息日の冒瀆は増加し続けた。世俗的な権力の手で、酒浸りや賭け事、売春、離婚率の着実な増加に表された罪の風潮を食い止めることは不可能に思われた<sup>5)</sup>

ロンドン主教のウィニントン・イングラムの見解はそのような「懲罰理論」の典型的なものであったと言われている。彼は、イースト・エンドの「オクスフォード・ハウス」の責任者として、不道德防止のための宗派間組織である「ロンドン公共道徳協議会」the Public Morality Council of Londonと協力して活動していた。彼自身のあらゆる努力にもかかわらず、不道德的な目的での公園の利用、猥褻な図書や写真の出版、産児制限の宣伝およびそのための器具の蔓延が生じているので、イングランドは神の怒りを受けざるを得ないとされた<sup>6)</sup>

さらに、ウェールズにおける国教廃止問題との関連で戦争をイングランドに対する罰と見る考え方もあった。1912年4月に議会に提出された「ウェールズ教会法案」は反対者によって「教会略奪法案」と呼ばれ、同法案の反対者たちは、国教廃止と教会財産没収に反対するためのデモや抗議行動を始めた。そして、その法案が通過して法律になって3ヶ月以内に戦争が勃発したことは、神の不满を示す明白なしるしと考えられた。ウェールズ教会の破壊は、後述のドイツによるルーベンの焼失やランスの爆撃よりも悪いものとされ、イングランドは、ウェールズ教会法を廃止しなければ勝利の祈りを行う権利もなく、神は次々と災禍を与えるであろうと考えられた。このような理論の提唱者は、イングランドの罪を挙げるだけでなく、すべての交戦国が特定の罪を犯していたのであり、フランスにおける教会と国家の分離、ポーランドにおけるドイツの不正、スラブ系少数民族からの民族の権利のオーストリアによる剥奪、および、ロシアによるユダヤ人の迫害などはすべて神の罰に値するものであると考えた。「あわれなベルギー」でさえも、コンゴにおいて残虐行為を行っていた<sup>7)</sup>

しかしながら、以上のような「懲罰理論」に対する批判者もいた。「近代主義者 modernists」の批判である。ストリーター B. H. Streeter は開戦2周年目に、懲罰理論は、災難の突発性に対する恐怖心からの反応であり、戦争の原因を説

明するには不適切であると指摘した。また、ラッシュドール Hastings Rashdall は、イングランドに関する限り、天の裁きは要因たり得ないと述べている。なぜなら、戦争は「裁きでも、懲罰でも、罪でもなく、わが国民が現代において自ら提示した最もすばらしい国民的正義 a finest piece of national righteousness」であると指摘している<sup>8)</sup>

また、キリスト教社会主義者も「懲罰理論」とは異なった立場に立っていた。キリスト教社会同盟 the Christian Social Union も教会社会主義者連盟 the Church Socialist League も、ヨーロッパの悲劇における神の作用 divine agency を最小に見積もった。彼らが罰 punishment を語る時には、欠陥のある諸制度やその諸制度が促進した価値観によって引き起こされたところの、自ら招いた苦痛を意味した。すべての近代戦争は、間接的に「政策」の戦争であり、実際には「血で赤く染まった資本主義の花」であった。キリスト教社会連盟の幹部ブル Paul Bull は、キリスト教社会主義者の姿勢の典型的な例であった。彼は、社会が無制限の競争と個人主義の原理に基づいて組織される限り、戦争が生ずると警告した。彼は、資本主義制度はその惨めな賃金奴隷によって覆されるか、永遠に拡大し続ける市場の必要性から生じる戦争の中で滅びるかであるとする悲観的な将来展望を抱いていた。彼は大戦の勃発に驚かず、むしろ資本主義文明が生き延びたことに驚いたと報告されている<sup>9)</sup>

さて、以上のような、戦争をイングランド自らの罪に対する神の罰と捉える大戦初期の見方は、次第に変化することになる。すなわち、戦争の責任をドイツ人に押しつけるようになるのである。「そのような途方もない規模の災厄の原因を、人間の罪深さあるいは経済的な因果関係といった単一の理論に求めることは、あまりにも単純であり、集中の事実すべてを説明することはできなかった<sup>10)</sup>」からである。

## II ドイツに対する聖職者の見方の変化

さて、第一次世界大戦以前のイギリス国教会には反ドイツ感情はほとんど見

られず、むしろ19世紀を通じて聖職者たちあるいはイギリスの支配階級は、親プロシアではないにしても親ドイツ的であったと言われている。19世紀後半においてはドイツ人は「人種」として、王室のつながりにおいて、イングランドに緊密に結びついた国民であると認識されていた。例えば、16世紀における「教皇のくびき」からの解放、教師と科学者の輩出、騎士道的な戦士としての国民、「最も道徳的水準の高い人民」としてドイツ人が引き合いに出されていた。また、ウィリアム・スタップス主教は、自らの著書『イングランド憲政史』の中で、イングランドの政治制度はローマ帝国を継承したドイツ人の法と慣習に起源があるという仮説を提示した。このようなドイツ人に対する高い評価は、ヴィルヘルム2世のもとでのドイツの建艦競争によってイングランドの海上覇権が挑戦を受けた時でも、大きな変化はなかったと言われている<sup>11)</sup>

以上のようなドイツ人に対するイギリスの聖職者たちの同情的な姿勢は、第一次世界大戦の勃発直後も続くことになる。このような親ドイツ的な見方は次第に不人気になりつつあったとはいえ、1914年9月末までは、ドイツの立場に一定の理解を示す発言が相次いだ。例えば、国教会の機関誌の中でも、『コモンウェルス *Commonwealth*』や『教会社会主義 *Church Socialist*』など、キリスト教社会主義系の機関誌には、ドイツ人民はイングランドや他の諸国と戦いたくないが、ロシアによって自衛のために剣を抜かざるを得なくなったという主張が散見されたし、ドイツ人の長所を賞賛し続ける聖職者もいた。ヘンリー・スコット・ホランドは、普通のドイツ兵士の勇氣と礼儀を賞賛していた。また、ウィリアム・テンプルによって創刊され編集された改革指向の新聞『チャレンジ』は、1915年1月22日号において、イングランドに対する敵意をむき出しにしたアーネスト・リッサウアー Ernest Lissauer の作品「憎しみの賛歌」は大多数のドイツ人には大変不快であるという証拠を公表すると宣言していた。さらに、エドワード・リトルトン Edward Lyttelton は、イートン校から、イングランドに余分の看護婦がいれば前線を越えて、傷ついたドイツ人のために働くべきであると訴えた<sup>12)</sup>

戦前においてはヨーロッパ人同士の戦争は「文明化された戦争」であるとい

う認識が広まっており、その前提には、戦争法に関するジュネーヴおよびハーグ会議での議論があった。イギリス国教会の機関誌の一つ『チャーチ・タイムズ』Church Times の編集者は米西戦争中に、「トルコ以外では子どもたちが気晴らしで殺されたり、女性が暴行されることはなく、非戦闘員の権利が尊重され……、戦争はもはや無差別殺戮や破壊の名前ではない」と宣言していたが、1914年8月25日からクリスマスの中に、「戦争の文明化」がまったくの希望的観測に過ぎなかったことを証明するような事件が生じた。ドイツ軍によるベルギーの都市ルーベンの占領と破壊である<sup>13)</sup> すなわち、「ベルギーのオクスフォード」と呼ばれたルーベンが1914年8月にドイツ軍によって占領された。ベルギー人のゲリラ兵によるドイツ軍に対する抵抗の銃声が鳴り響くと、ドイツ師団はそれに対して報復措置をとった。その結果、ルーベンの家々は略奪され、209名の市民が死亡し、さらにルーベン大学の23万冊の大図書館のほとんどの蔵書が焼失せしめられた。このようなルーベンにおけるドイツ軍の報復行動に対して、フランスの平和主義作家ロマン・ロランは厳しく非難し、この事件の中に「プロシアによる帝国主義的冒険の証拠」を見出した<sup>14)</sup> 次の詩が、人びとの気持ちを代弁したと言われている。

「ルーベン Louvain」

この卑怯者の汚点を消すことはだれもできない。  
忘れることのできない許されざるものとして。  
ドイツ皇帝よ、お前の黒い戦の盾にはこの汚点が  
より陰鬱な汚点が永遠に残るであろう。  
宗教、図書、碑文および物語の描かれた窓ガラス、  
お前が撃ち殺した人間と同じくむなしく訴えた。  
何故にわれわれの憤りが灼熱に燃えているのか、  
ルーヴェンの燃え立つ灰の上で<sup>15)</sup>

このルーベンの事件の後、降臨節の開始に当たる12月16日に、ヒッパー提督率いるドイツ海軍の小艦隊が、スカボローやホイットビー、ハートルプールの町を爆撃し、多くの市民に犠牲者を出した。このようにイギリス本土が攻撃

を受けたのは、1667年にオランダによってシャーネスが襲撃されて以来初めてのことであったと言われた。さらに、新年になっても戦争が継続したことは、戦争が初雪とともに終了すると信じていた人びとを落胆させた。発表された説教や記事は、不安と落胆の増大を示した。連合国がいかにか罪深くまた罰に値するものであるにせよ、そのような恐ろしい災難に値するものではないという気持ちが次第に強くなっていった。かくして、聖職者の戦争に対する見解に変化が生じたのである。「実際に生じていることを説明するのに、あるいは引き延ばされた戦闘に必要な道徳水準を維持するのに、既存の理論では不十分であると聖職者が認識するにつれて、戦争や敵に対する聖職者の考え方は変化した<sup>16)</sup>」のである。

### Ⅲ ウィリアム・テンブルの戦争論

さて、第一次世界大戦期にウィリアム・テンブルは戦争とどのように向き合ったのだろうか。テンブルは戦時中、ロンドンの中心街ピカデリーにあるセント・ジェームズ教会の主任司祭を務め、教区民のための活動を行うと同時に、国教会の改革運動に乗り出すことになる。テンブルは、戦時中様々な形で戦争と向き合うことになるが、国教会として戦争をどのように考えるかについて一連の「戦時論集」の第1号として、『キリスト教と戦争』と題する全文16頁からなるパンフレットを出版している。1914年に出版されたテンブルのこのパンフレットの内容を検討しておくことにしよう。

まず最初に「注釈 Explanatory Note」において、「戦時論集」の趣旨を次のように説明している。「イギリス Great Britain は、国民にとって名誉ある退却の道は無いと思われるような戦争を戦っている。祖国を愛するすべての人々の希望は、祖国の危急時に祖国に奉仕することであり、また、祖国への奉仕の中で死んだ人々が無駄死にとならないように、生きて労働することである。緊急の義務を明確にするためにはこれで十分であるかも知れないが、戦争は、最も深い意味でキリスト教的な思考への挑戦である。何世紀にもわたって洗礼名を付

けてきた諸国民の間で現在行われている激しい戦闘は、キリストの諸原理を理解してそれらを人事に適應することが失敗したことを例証している。「この一連の論文は、共通の思考、討論及び祈りによって、キリスト教の意味と、個人や社会、世界に対する教会の使命 mission について真の理解に到達しようとする試みの一つである<sup>17)</sup>」。

このようにこの一連の論文の趣旨は、キリスト教徒同士が激しい戦争を戦うという事態に直面したキリスト教徒が、自らの信仰をどのように考えるべきかについて真摯に問題を提起するものであったと言えよう。

では、ウィリアム・テンブルの論文「キリスト教と戦争」の内容について見ておこう。

異教化した世界において、キリスト教徒は何をすればよいのだろうか。なぜならこの世は異教化しているからである。キリストの体の構成員はお互いに涙を流し、かつてゴルゴタで血を流したのと同じように、キリストの体は血を流しているが、今度は、キリストの友人たちによって傷つけられている。あたかもペテロが釘を打ち込み、ヨハネが脇腹を刺していたかのようである。

しかし、少なくとも私が理解する限りでは、わが国民が戦争を宣言したのは正しく、国民の呼びかけに応じて戦っている人々は正義のために戦っており、兵士になる以外に奉仕する方法のない正義なのである。

難問となるに十分な理由が存在する。批判者は、キリスト教が崩壊してしまったとさえ述べようと、キリスト教の破産が告白される。しかし我々は少なくともそれに言い返すことができる。この戦争は、キリスト教の破産を意味しているのではなく、実際には、キリスト教による世界の征服の過程で大いなる進歩を意味している。なぜなら、この戦争は、戦争が我々の宗教の崩壊を印していると多くの人々が述べた初めての戦争だからである<sup>18)</sup>。

以上のようなこの論文の冒頭に見られるように、第一次世界大戦においてキリスト教徒同士が、特にドイツ人とイギリス人が戦うことへの嘆きが一方で語ら



れながら、その一方で、イギリスが国民として宣戦を布告したことは正義であり、兵士として祖国のために戦うことが正義であるとされている。そして、第一次世界大戦でキリスト教徒同士が戦うことはキリスト教の破産ではないと宣言している。

そしてテンプルは、三つの問題を提起する。第一にキリスト教徒は、現実の宣戦布告と軍隊への招集に関してどのような立場を取るべきなのか、第二に、キリスト教徒は戦時期にどのように行動すべきか、第三に、戦争勃発の結果キリスト教徒の注意を惹きつけるような理論上・実践上の主要な問題とは何か、である。以下その順序に従って検討していくことにしよう。

## 1 宣戦と招集

テンプルは戦争に関して三つの立場がありうることを説明し、この三者の立場について詳しく言及している。

第一に、「自らの目的は正義であると信じて、覚悟の上というだけでなく、嬉々としてその目的で人を殺すために、あるいは殺されるために戦場に赴く人」である。「そのような人は、自分が正義であるがゆえに敵は悪であると主張する必要はない。悲劇のほとんどはある正義と別の正義との闘争から生じることに気づいているはずだからである。彼にとって、祖国の正義を支持するには、祖国が彼を必要としているということだけで十分であり、彼は喜んで軍務に就く。彼の力がその決定に影響を及ぼす場合には、彼は宣戦するためにその力を利用する。なぜなら、彼は、正義であると自ら信ずる目的に奉仕するには、それ以外の手段はあり得ないと確信しているからである<sup>19)</sup>」。そしてテンプルは、次のように問いかける。「この点において彼は間違っているのだろうか。キリスト教徒の英雄的行為のほとんど——あるいは少なくとも、記録されたキリスト教徒の英雄的行為——は、この形態をとったのではなかったか。彼を非難することは不可能に思える。しかし、キリストがそれを得ようと戦おうとはしなかった彼の目的ほど、これまでに正しい目的はなかった。それは、この世の諸

国家の目的が物質的であるのにキリストの目的は霊的であったためなのであるか。もしそうであるとすれば、霊的なものは物質的なものをどの程度まで支配しうるのだろうか。あるいはまた、もし、神の国に、最良の人間のほとんどすべての人々に前線に立ちたいと思わせる冒険心や義務感に機会を提供するような戦争が存在しないならば、神の国はこのすばらしい熱意のために別のはけ口を提供しうるのだろうか<sup>20)</sup>。

戦争に対する第二の立場は、「彼の属する国民にとってあるいは彼自身にとって状況が戦争を義務としたのであるが、それは忌まわしい義務であると考える」立場である。その場合、「陽気さもなければ勝利の歓喜もなく、辛い義務感が存在する」。この立場は第一の立場ほど問題を引き起こさないが、「イエス・キリストが戦場に入ったり、弟子たちにそうするように命じたりすることをわれわれが思い描くことができるかどうかを問わなくてはならない。場合によっては——この場合には——戦争は義務ではないのか<sup>21)</sup>」と。

戦争に対する第三の立場は、「フレンド教会やトルストイの名前と結びついた教義」、「無抵抗 Non-resistance」、「悪に抵抗するな」という教義である。テンプルはこの絶対平和主義に対しては次のように批判する。「しかしわれわれは、キリストの教えを彼の行動によって解釈しなければならない。キリストは物理的に抵抗しなかったが、彼は彼の時代の悪に抵抗し、死に至りさえした。……彼は戦いをさけようとはせず、彼は戦いの中へと入って行った。しかし彼は武器を持たずに戦いに入り、ベテロに、剣を鞘に収めるように命じた。これが、キリスト教国民にとっての真の行動指針であろうか。『無抵抗の代償』は何か。他の諸国民が苦闘し、われわれが必然的に他の諸国民の貿易と商業を横取りする間に、動かずにただじっとしていることは、十字架の道ではないとわれわれが言うのであれば、すべての友会徒 Friends は確実にわれわれに合意するであろう。平和は、戦わないことだけを意味するのであれば、戦争よりもはるかにキリストの精神からかけ離れたものとなる<sup>22)</sup>」と。

以上の問題は、次の二つの結論の中どちらか一方を示していると言う。すなわち、キリストの規範は個人と個人の関係に適応可能であって、国家には適応

できないという結論、もうひとつは、「正義と呼びうるようなことを単独で実行するのをしばしば不可能にしてしまうような罪のもつれが存在し、したがって、それ自体悪であることを実行するのが義務となる<sup>23)</sup>」という結論である。次にこれらの結論について検討する。

## 2 戦時におけるキリスト教徒の行動

テンブルは、実際に戦争が進む中でキリスト教徒はどのように行動すればよいのかについて問いかけている。それに対して、「汝の敵を愛せよ。汝を罵る者を祝福せよ。また、悪意を抱いて汝を利用して汝を虐げる者たちのために祈れ」という聖書の言葉を引用しながら、敵を憎み、敵の悪を信じ、報復し、敵に災いが落ちるように祈るのは「自然なこと natural」であるが、「キリストの宗教は、——自然そのものを別として——自然 nature と思われるものの否定なのである」として、敵に対する憎しみを抑えるよう人びとに要求する。新聞は敵への憎しみを煽るような記事を集めているが、「あらゆる手段によって真実が語れるようにしなさい。われわれの敵に不利な事柄で、証明された真実以外は何も語ってはならない」と戒める。さらに、キリスト教徒は「目には目を」という報復は自らの掟ではなく、「敵もまた神の子であり」、「神はわれわれにとってと同様に彼らにとっても彼自身の目標を持っており、われわれに対してと同様に彼らに対しても同じ愛を有している」と述べている。そしてキリスト教徒は「征服」を望まず、「普遍教会と協力して、あらゆる国民にその十分な地位を与えるような和解を戦いを通じて思い描いている」。また、ドイツ市場に関して、戦時において包囲網を敷くことは戦争の一部であるが、戦後にドイツ市場をイギリスが確保しようと望むのは、「プロイセン・システムにあるもっとも嘆かわしい特徴と考えられるものと同じ形態の攻撃性<sup>24)</sup>」であると戒めている。

次にテンブルはイギリスの宣戦布告について次のように正当化すると同時に、イギリス人の目から塵を除去する必要性を述べている。あるいは経済的形

態でのイギリス自身の攻撃性を自らの中から除去すべきことを示唆している。

まず、キリスト教徒は、悪に加担することを後悔するものであり、イギリスが「戦争を宣言したのは当時正しく、また、厳粛にそうする義務があった。当時は、それがわれわれのなすべき唯一の正しいことであった」。テンプルはこのようにイギリスの宣戦を正当化した後で、「そもそもそのような瞬間が生じてしまったのはなぜか」、また、「平和を促進するために、また平和のために努力するドイツの人々と協力するために、われわれは全力を尽くしただろうか」と自ら問いかける。そしてイギリス人はプロイセンの侵略性の歴史や、ニーチェやトライチュケ、ベルンハルディの著作、さらにはベルギーの中立侵犯に言及するが、「たとえドイツ人の目の中に梁があり、われわれの目の中には塵があるだけだとしても、そこに塵があることをわれわれは否定できない。またそれは塵だけであろうか。イギリスの歴史と地勢が、われわれを軍事的ではなく商業的にした。しかしわれわれの産業制度においては、他のどの国も経験したことのないほどの略奪と攻撃の精神、弱者への抑圧、成功の称賛を解き放ってしまった。これは、軍事的形態でのプロイセンの邪悪な気風とわれわれが考える精神と同じものである。われわれはそのような軍事的形態でのプロイセンの邪悪な気風と戦わねばならない。しかしながら、われわれは、悔悛の中で、またあらゆる形態でのその気風をわれわれ自身の中から追い出す決意の中で、戦わなければならない」と<sup>25)</sup>さらに、「ドイツ人たちがわれわれの祈りを必要とすることは確実である。彼らに対して一般に向けられている非難が正しければ正しいほど、われわれが彼らのために祈ることはますます必要である。もしイングランドが真の信仰を持つとすれば、力と力の不毛な協議よりも、交戦中の諸国民とその支配者たちに聖霊を注ぎ込むことによって、この戦争を止めさせることができるという考えに敢えて疑問を抱くだろうか。共通の信仰を表明し、われわれの意志ではなく神の意志の実現（全ての祈りはそうあらねばならないが）に向けられた祈りの力は、教会がこれまでほとんど利用したことのない力である<sup>26)</sup>」と述べている。

### 3 戦争によって提起された諸問題

次にテンプルは、「この戦争によって提起されているわれわれの宗教生活および教義全体に関する諸問題は、ほとんど数限りなく存在するように思える。戦争はわれわれの信仰全体に対する挑戦である。われわれはどのようにしたら、神の全能の愛をなおも信ずることができるのだろうか」と問い、戦争によって提起された宗教生活および教義に関する諸問題を整理している。

悪の問題が指摘されているが、その後には詳述されている問題は、国家がキリストの法に従うことができるか否かという問題である。この問題に関してテンプルは次のように議論している。

「一つの重大な問題は、国家はそもそもキリストの法に従うことができるか否かという問題である。自己犠牲は共同体に適用した時に何か意味を持っているのか、また、もし意味を持つとすれば、それは美徳であるのか。『自己犠牲を行う個人』という語句における意味以外に、『自己犠牲を行う共同体』という語句には何か意味があるのか。というのは、ベルンハルディのプロイセンでさえそのような共同体だからである。そしてもし一つの国民において自己犠牲が正しいとすれば、政府はその国民をかゝの苦痛に満ちた美徳にかかわらせることが可能なのか」と問いかけている。ただしそれに対する回答を保留したまま、議論を進めている。

そして、テンプルは絶対平和主義の立場について論評し、次のように一定の理解を示す。

「キリストの法は国家に適応不可能であるという理由で、あるいは今までのところ当該国家はそこまで高まっていないという理由で、国民がキリストの法に従わないとすれば、個々のキリスト教徒は何ができるのか。個々のキリスト教徒は、基本的なキリスト教原則と一致して行動する義務があり、キリストは暴力を使うことを拒んだので個々のキリスト教徒も同様に行動しなければならず、それゆえ、まったく正しい目標を守るためであっても、一人のキリスト教徒が武器を取ることは不可能であると考える人々がいる。これらの信念を正直

に信奉する人々は、最も高い尊敬を受ける資格が与えられている。国民は彼らなしには悪を行うことになる。世界の進歩は、全ての妥協を拒否して、大胆にもその理想に到達しようとする人々によるものであった。もし、自らの認識したキリスト教原則を、国民的利益の要件を含む、他のいかなる要件よりも上位に置く用意のある人々がいなければ、国民は、キリスト教信仰の高さと深みを見失う危険性がある<sup>27)</sup>」。

このように絶対平和主義につながる考え方について理解を示しながらも、テンプルはキリスト教徒の大多数はそのような立場を採らず、それに対して疑問を抱いていると論じる。

「キリストは霊的な王国の基礎を築いたが、物理的暴力 *physical force* の使用は、キリストの目的全体を敗北させてしまったはずである。しかし、霊的力 *spiritual power* の自由な行動を保証するために悪人を阻止しようとして暴力 *force* を使うことは許されないだろうか。もし、わが人民の多くがすでに言及したような諸原則に基づいて行動することになれば、現在の戦闘におけるイギリスの力 *power* はひどく弱められ、事態が不利になることは明白である。国民全体が無抵抗の方針を受け入れる覚悟をして、この災難を神は善なるものために覆すことができるという確固たる信念を持つとするならば、無抵抗の方針を採用するのは少なくとも可能であろう。しかし、国民はそのようにする覚悟はない。いずれにせよ戦争は続くであろう。そのような方針を採った場合の唯一確実な結果は、イギリスが目指している目標の敗北であろう。その目標の勝利をイギリスのキリスト教徒たちは人類のためであると信じている。また、その目標の敗北は、人類の最良の利益とは敵対する諸勢力の勝利となろう。同郷人が現在行っている英雄的な犠牲は無駄になってしまうであろう。このような事実や、彼ら同郷人が懐いている国民との一体感の結果、キリスト教徒の大多数は、国民が戦っている戦闘においては国民に対して最大限の支持を与えるのが自らの義務であると感じている。このような態度を採る場合、彼らはキリスト教の諸原則を傷つけているとは感じていない。国民は真の実在を有している。個人と同じく、国民は、神の王国に寄与すべきものを持っている。個人は

まったく一人で生きることにはできない。国民は誤解されて、卑しい情念に仕えさせられる可能性があるということは、このような立場の妥当性に影響することはない<sup>26)</sup>」。

以上のように言及するテンブルは、悪を阻止するために暴力を使うことは許されるとして、先に一定の理解を示した絶対平和主義の考え方とは違う立場に立つことを明らかにしている。また、テンブルはイギリスのキリスト教徒たちが実際に戦争を戦って、自分たちが正義であると考えていることを追認しているようにも思える。さらに、国民 (nation) というものが実態を持ったものであり、個人と同様に国民も神の王国に寄与しようと考えている。ここに、テンブルのナショナリズムに対する考え方の一端が示されているのではないだろうか。

この現実の戦争についてテンブルは次のように議論を続ける。

「8月4日にイングランドが、また、当時も今も、いかなるイングランド人も、キリストの精神と完全に一致して行動することは不可能であった。キリストは罪深い世界の中で神聖なる生活を送った。それは奇跡であった。しかしわれわれにはできない。キリストの体、キリストの意志の器官であるのは、個々のキリスト教徒ではなく、教会全体である。全ての諸国民の栄光と名誉がその中に挿入された時に初めて完成された教会が、キリストの意志の完成された組織であり、キリストの完全さの名声の秤なのである。罪深き人間はキリストの人生を生きることにはできず、罪深き国民はキリストの掟に完全に従うことはできず、また、罪深き国民の市民は、彼の属する国民の罪からまったく逃れることはできない。疑いなく、このことは、卑しい人々によって自らの卑しさの言い訳として弁明されるであろう。しかし、キリスト教徒は、自分では壊すことのできない鎖に結ばれ、縛られているという事実をいよいよ思い知らされる」。

「私は、惨めな人間である。誰が私をこの死の体から解放してくれるであろうか。というのも、われわれのなし得る最も正しいことでさえ邪悪な場合には、われわれが選択を余儀なくされたことは、罪の恐るべき結果である。より大きな悪とより小さな悪との間の選択である。また、より小さな悪を選ぶことにお

いてわれわれが正しいとしても、また絶対的に正しいとしても、それは依然として悪である。というのは、それはなお神の聖なる意志への完全な服従ではないからである<sup>29)</sup>。

そしてテンプルは、「懸命に考え抜いた良心には、少なくともそのように思える。また、そこから逃れる手段は、われわれに課された重荷を担うことを拒否することによってではなく、その重荷を悔悛の中でより深い信仰のための祈りとともに担うことによってである<sup>30)</sup>」と述べ、国民一人一人がその重荷を担うことを要求するのである。

#### 4 普遍教会 a Catholic Church の必要性

この論文の最後においてテンプルは、市民と国民と教会との関係について理論的に論じ、諸国民が真の平和を達成するための条件として、「普遍教会」の必要性を論じている。この部分はテンプルの国民国家に対する考え方を知る上で重要であり、詳しく見ていくことにしよう。

まずテンプルは、国民国家の至上性というドイツのベルンハルディの考え方を説明する。「国民国家は至高の現実性 highest actuality であり、それゆえに忠誠心の至高の対象であるとするベルンハルディの主張には、かなりの影響力がある。また、それは、国家にはまったく義務がない（なぜなら、仮定上、そのような義務の作用するような諸国家の集まりは存在しないので）という邪悪な教義へとまっすぐにつながるのである。しかしながら、われわれには、天の王国 a Kingdom of Heaven と教会 a Church 以外にはそれに対抗するものは何もない。前者はこの世にはなく、理想的で、（少なくとも歴史的には）事実ではないし、また、後者は、単一でも普遍的でも神聖でもない<sup>31)</sup>」。

「われわれが必要とするのは、現実的にも認識的にも一つで、キリストへの崇敬 devotion によって纏められた単一の国際社会 an international society である。もし世界にそのような国際社会が存在するならば、個々のキリスト教徒は、国民への彼の帰属を感じるのと同じように、それへの帰属を感じるであら



う。それに対する忠誠心は、多くの善良な人々がユートピアとして軽蔑するような、また、その価値についての彼自身の潜在的な疑問によって無効にされるような、努力ではないであろう。そのような国際社会は、その構成員を完全に彼ら自身の祖国の市民のままでありながら、その構成員をその国際社会に結びつけることによって、キリストの理想に少しでも近づき、自分たちの祖国を彼らとともに歩ませようとする彼らの希望を大いに助けるであろう。そして、「神聖な普遍教会 Holy Catholic Church の存在を信じ、それが存在しないことを残念に思う」とともに、今度の戦争は、「キリスト世界の統一のために苦勞する人々にとって新たな拍車となる<sup>32)</sup>」としている。

そしてこの「神聖な普遍教会」について次のように説明する。かつては「古い教皇制度」が存在していたが、「その最大の支持者たちが理解したような古い教皇制度は、人が一般にかつて行おうとした最も崇高な理想であった——志において最も崇高で、論理において最も確実なものであった。しかし、中世の栄光と失敗であった無謀な観念論 idealism とともに、それは、近道によってその目的地に到達しようと試みた。それは、神の目的のためにこの世の手段を利用した。それゆえにそれは失敗した。しかし、もし当時の野蛮なヨーロッパがたとえ一時でも、神聖な社会が国民的な区分を超越するという理想を理解しえたならば、われわれは、何世紀もかけて達成されたより深い理解をもって、そのような社会が再び築き上げられることを望んでいる<sup>33)</sup>」。

そして「戦争の不在という意味での平和は、一定期間の間、商業的あるいは金融的利害によって保証されるかも知れない。しかし、国民の絆は貿易会社の絆よりも名誉なものであるため、そのような平和よりも戦争の方が崇高な場合がある。世界にとっての唯一の真の平和、愛と喜びの双子である平和、聖霊の贈り物である平和とは、すべての諸国民とすべての人種を、地上に実現される一つの神の国の一部として認めることにある」。それゆえ「この戦争は、キリスト教徒に対する思想、悔悛、行動に関する挑戦である<sup>34)</sup>」と。

そして最後に戦争におけるキリスト教会の任務として、「教会は、戦争の遂行においてわれわれの敵に対する名誉や寛大さ、愛というキリスト教の諸原則

が忘れられないように努めなくてはならない。また、和解が生じたときにはその和解が、神の王国の建設のためにすべての諸国民に必要であるというキリスト教の諸前提と、一致すべきことを保証しなくてはならない。また、われわれ自身の祖国は、敗北においてであれ、勝利というより厳しい試練においてであれ、その心と精神を開いて、神が教える教訓を学び、そして、自らの最高の使命は神の意志を発見してそれを行うことであるということを認識しながら、神が定める未来へと進むべきである<sup>35)</sup>と。

## お わ り に

第一次世界大戦が勃発すると、それまで平和について楽観的な希望を懐いていた聖職者たちは、衝撃を受けることになる。中には戦争を「聖戦」として人々に訴えかける聖職者も出現することになった。戦争勃発当初、戦争をイングランド自身の罪に対する神の罰として捉える見方が主流となり、特に飲酒や猥褻、教会出席の衰退など、イングランド人の安息日違反に対する神の罰として戦争を位置づけた。しかしながら、1914年8月からクリスマスにかけての時期には、このような戦争認識に大きな転換が見られた。特に、戦争をドイツ人の罪という観点で捉えるようになる。こうして戦争の責任をもっぱらドイツ人に求める見解が主流となる。かくして、戦争の過程で聖職者たちは、それ以前の平和主義的な立場を捨て、ドイツとの戦いを国民の義務として訴えかけるのである。もちろん彼ら聖職者の立場にもかなりの幅があり、ドイツとの戦争を「聖戦」として命を捧げることを要求する聖職者もいれば、一方で同じキリスト教としてドイツ人とともに祈る必要があると考える聖職者もいた。

そして第二次世界大戦期にナチス・ドイツに対する戦争を信仰の面から支えたウィリアム・テンプルは、第一次世界大戦期にはロンドンのセント・ジェームズ教会の主任司祭を務め、教区民のための活動を行うと同時に、国教会の改革運動に乗り出すことになる。テンプルは、1914年に公表した「キリスト教と戦争」というパンフレットにおいて戦争に対する基本的な立場を提示してい

る。この時期は、先に述べたようにまだドイツやドイツ人に対して同情的な姿勢が見られる一方で、ルーベンの事件をきっかけに聖職者たちのドイツに対する姿勢が大きく変化する時期でもあった。テンブルの当該論文を詳しく見ると、冒頭、同じキリスト教徒であるイギリス人とドイツ人が戦うことに対する絶望感と、戦争の中でキリスト教信仰の在り方が試されるという見通しを示している。第一に、ドイツに対する宣戦布告と招集に対してキリスト教徒がどのような姿勢を取れば良いのかについて論じている。その場合テンブルは、人びとの反応として、第一に自らの目的は正義であるとして祖国のために進んで嬉々として戦場に赴く人びと、第二に、戦争は忌まわしい義務であるとして、陽気さも勝利の歓喜もなく、義務感のもとで戦場に赴く人、第三に、「無抵抗」の教義を信奉する人びとで絶対平和主義の立場である。この三つの立場があり得ることを述べた後、テンブルは、第二に、イギリスの宣戦が正しいものであったが、単純にドイツ人のみに責任を帰して自らが正義であると主張するわけではなく、イギリス人自身の中から「プロイセン的な邪悪な気風」を排除する必要性を訴えた。さらにドイツ人のために祈るの必要があり、イングランドは真の信仰を持たなければならないと訴えるのである。ここにテンブルの立場の独自性が看取されよう。第三に、以上の原則に基づいて戦争に伴って生じた様々な問題を扱い、特に国家にキリストの法は適用できるのかどうかを論じ、その適用の必要性を訴え、さらには、悪を阻止するためには暴力の使用も正当化しうるとして、キリスト教徒が戦争に参加する正当性を強調する。そのなかで個人だけでなく国民も神の国に寄与しうることを強調する。そして罪深き人間は、罪深き世界の中ではキリストのように聖なる人生を送ることは不可能であり、人間にはより大きな悪とより小さな悪との間の選択しかないと述べ、絶対平和主義の立場を間接的に批判する。そして第四に、単に戦争がないという意味での平和ではなく、真の平和のためには、「キリストへの崇敬によって結びつけられた単一の国際社会」が必要であると力説し、「神聖な普遍教会」の必要性を訴えたのである。そこでは商業的利益や金融的利益で保証される戦争のないという意味での平和ではなく、すべての諸国民とすべての諸人種を包含するよ

うな国際共同体がイメージされている。これは後のテンブルのエキュメニカル運動へと繋がるのである。

この1914年の「キリスト教と戦争」における考え方は、その後第一次世界大戦を通じて維持され続ける考え方であった。この見解は、イギリス国教会の聖職者たちが次第にドイツに対して否定的な立場に移るにしたがって、テンブルの独自性を際立たせることになる。そしてこの立場は、後の第二次世界大戦におけるテンブルの立場にも基本的に一貫してみられるものとなる。そのような意味でこの戦争論はテンブルの基本的な立場であったと言える。

## 注

- 1) 第二次世界大戦期におけるウィリアム・テンブルの戦争論については、拙稿「社会改革における教会の位置に関するウィリアム・テンブルの見解」『愛媛大学法文学部論集・人文科学編』17号、2004年、および拙稿「戦争と国教会——ウィリアム・テンブルの活動を中心に——」（松本彰・立石博高編著『国民国家と帝国』山川出版社、2005年所収）を参照。
- 2) F. A. Iremonger, *William Temple: Archbishop of Canterbury His Life and Letters*, London, 1948, pp. 167-173. テンブルの活動を知るにはテンブルの書簡を利用したアイアモンガーのこの伝記が基本的な史料となる。
- 3) 近年、記憶や記念碑の問題に対する関心から、第一次世界大戦後にこぞって建設された戦争記念碑に関する研究が注目されている。第一次世界大戦の戦争記念碑を直接あつかったものに、社会学の立場から栗津賢太「ナショナリズムとモニュメント——英国の戦没記念碑における伝統と記憶——」（大谷栄一他編著『構築される信念——宗教社会学のアクチュアリティを求めて——』ハーベスト社、2000年所収）、「正戦」と「反戦」の思想の形成について論じた津田博司「正戦と反戦のはざまに——大戦間期イギリスにおける戦没者追悼をめぐって——」『パブリック・ヒストリー』第1巻、2004年、対仏戦争以降の戦争記念碑の歴史的变化の延長線上に第一次世界大戦の戦争記念碑を位置づけた小島崇「近代イギリスにおける戦争の記念・顕彰行為——対仏戦争～第一次大戦の記念碑」若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史——史誌・記念碑・郷土』名古屋大学出版会、2005年などがある。

- 4) 第一次世界大戦期におけるイギリス国教会の活動や思想を正面からあつかった研究には、Albert Marrin, *The Last Crusade: The Church of England in the First World War*, Durham, 1974; Alan Wilkinson, *The Church of England and the First World War*, London, 1978 がある。本稿では、主にマリンの研究を参考にする。この研究はイギリス国教会の機関誌などの分析を通じて当時の国教会の戦争に対する関わりを丹念に整理した実証研究である。また、後者の研究は、キリスト教知識普及協会 (SPCK) によって出版されたもので、著者自身がイギリス国教会の聖職者であり、イギリス国教会の立場から第一次世界大戦期における聖職者たちの活動をあつかったものである。
- 5) Marrin, *op. cit.*, pp. 82-83.  
6) *Ibid.*, p. 83.  
7) *Ibid.*, pp. 83-84.  
8) *Ibid.*, p. 84.  
9) *Ibid.*  
10) *Ibid.*, p. 85.  
11) William Stubbs, *Constitutional History of England to 1485, 1873-1875*. Marrin, *op. cit.*, pp. 85-86.  
12) *Ibid.*, pp. 87-88. Edward Lyttelton, *What Are We Fighting For?*, 1914.  
13) Marrin, *op. cit.*, pp. 88-89.  
14) ルーベンにおけるドイツ軍の報復については Vincent Sherry (ed.), *The Cambridge Companion to the Literature of the First World War*, Cambridge, 2005, p. 194 を参照。  
15) Marrin, *op. cit.*, p. 89.  
16) *Ibid.*  
17) William Temple, *Christianity and War*, London, 1914, p. 2.  
18) *Ibid.*, p. 3.  
19) *Ibid.*, p. 5.  
20) *Ibid.*, pp. 5-6.  
21) *Ibid.*, p. 6.  
22) *Ibid.*, p. 6-7.  
23) *Ibid.*, p. 7.  
24) *Ibid.*, p. 8.  
25) *Ibid.*, p. 9.  
26) *Ibid.*, pp. 9-10.  
27) *Ibid.*, p. 11.

28) *Ibid.*, pp. 11-12.

29) *Ibid.*, p. 13.

30) *Ibid.*, p. 14.

31) *Ibid.*

32) *Ibid.*, pp. 14-15.

33) *Ibid.*, p. 15.

34) *Ibid.*, p. 16.

35) *Ibid.*

(本稿は、平成16年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「イギリスにおける福祉国家の成立と国教会」の研究成果の一部である。)